

News Letter

2025
Winter issue

令和7年12月15日発行

Japan Society for the Sociology of Sport and Physical Education



日本体育社会学会

事務局：〒651-2187

兵庫県神戸市西区学園東町 9-1

神戸市外国語大学 常行泰子研究室内

E-mail: jimukyoku@jssspe.org

< 目 次 >

日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会	
傍聴記	1
『年報体育社会学』編集委員会より	4
事務局より	5
新企画「ちょっと一息、体育社会学」	
始動によせて	9
あとがき	10
ちょっと一息、体育社会学	

<日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会傍聴記>

2025年8月27日から29日にかけて、日本体育大学で日本体育・スポーツ・健康学会第75回が開催された。27日の9:40から11:40に、「部活動地域展開後の学校教育・体育を再考する—レーザンデートルと事業構造—」というテーマで体育経営管理専門領域との合同シンポジウムが行われた。コーディネーターを清水紀宏先生（筑波大学）が務め、シンポジストとして本田由紀先生（東京大学）、松田恵示先生（神戸親和大学、立教大学）、野崎武司先生（香川大学名誉教授）が登壇した。全体の流れとしては、コーディネーターの清水先生が企画の趣旨説明を行い、その後シンポジストの本田先生、松田先生、野崎先生が順に各30分の持ち時間で報告を行い、残りの30分で全体に開いた質疑応答がなされた。以下では、全体の流れに沿って概要を記載し、最後に筆者が本シンポジウムをもとに感じたことについて記載する。

コーディネーターの清水紀宏先生は、筑波大学大学院体育研究科修了後、金沢大学を経て、現在は筑波大学で教鞭をとっている。専門は体育・スポーツ経営学であり、学校体育のカリキュラム・マネジメントや部活動のあり方、子どものスポーツ格差などの研究を進めている。

清水先生から、次のように本シンポジウムの趣旨説明がなされた。2021年に「日本体育学会」は「日本体育・スポーツ・健康学会」へと改称されたが、その背景には学会員の研究関心が従来の「体育」から「スポーツ」や「健康」へと移行してきたことがある。他方で近年、スポーツ改革の議論が進むなかで、スポーツの発展や健康づくりの基盤をなしてきた学校体育が大きく揺らいできている。こうした状況を踏まえ、本シンポジウムは学校体育に焦点を当てて企画された。具体的には、「部活動がなくなるということは、学校にとってどんな意味があるのか。学校や体育、そして体育教師はどのように変わるのか。変わらなければならないのか」という問題提起が本シンポジウム全体を貫く視点として提示された。

1人目の報告者である本田由紀先生は、東京大学大学院教育学研究科を修了後、日本労働研究機構研究員、東京大学社会科学研究所助教授を経て、現在は東京大学大学院教育学研究科で教鞭をとっている。専門は教育社会学であり、主に教育・仕事・家族という3つの社会領域に関する実証研究を行っている。本田先生からは『「これからの学校像』からみた学校教育／体育の再編』というタイトルで報告がなされた。以下、概要である。

本田先生によれば、「いま（これまで）の学校像」は、大人数学級、一斉・一方向型授業であるがゆえに、「垂直的序列化」と「水平的画一化」を生じさせてきたという。「垂直的序列化」は「能力」、「水平的画一化」は「態度」「資質」をキーワードとして、戦後の教育政策を通して確立してきた。そして現在、「垂直的序列化」は「学力」を基準とした「日本型メリットクラシー」、「人間力」を基準とした「ハイパー・メリットクラシー」として現れており、部活動も「ハイパー・メリットクラシー」として評価の対象になっているという。また、「水平的画一化」は「ハイパー教化」として現れているとされる。これらのバランスは時代に合わせた教育政策によって変わるが、今世紀になってからは「垂直的序列化」「水平的画一化」のどちらも顕著に重視されていることが指摘された。このような「垂直的序列化」と「水平的画一化」は、価値基準を一元化するがゆえに、格差や排除・抑圧を生み出してしまうという。その結果、子どもたちの自己効力感の低下や、不登校やいじめ、ひいては「体育嫌い」にもつながっていると本田先生は述べる。

このような現状を開拓するために「これからの学校像」としては、個々の生徒に即したきめ細かい選択肢のある教育を施し、「水平的多様性」を実現させていくことが重要であるという。それを可能にするために、学習指導要領を厳選化・スリム化したものを必修とする「ミニマム・コア」、それ以外で自由度を高める「オプション」の二層構造で考える必要が提示された。本田先生によれば、教育課程外の活動である部活動に教育的基盤を求めるのではなく、「ミニマム・コア」として生徒全員が参加する教育課程内の教科教育、つまり「体育」の充実が重要であるという。

2人目の報告者である松田恵示先生は、大阪教育大学大学院教育学研究科を修了後、大手前女子大学（当時）、岡山大学、東京学芸大学を経て、現在は神戸親和大学、立教大学で教鞭をとっている。専門は社会学、スポーツ社会学であり、社会意識論の立場から「遊ぶ文化」の研究を行っているほか、教育政策、教員養成政策、体育科教育の領域においても実践的な研究と活動を行っている。松田先生からは「学校体育のレーザンデートルを『再び』問う」というタイトルで報告がなされた。以下、概要である。

本シンポジウムの副題にもなっている「レーザンデートル」は「存在理由」や「存在価値」のフランス語であるが、学校体育は度々その「存在理由」を問われてきた。松田先生は体育概念の歴史的変遷を整理した上で、現在は「体育嫌い」の問題などを機に学校体育の「レーザンデートル」が再び問われていると述べる。

松田先生は、体育概念の変遷を「人間形成」「からだ」「楽しさ」の関係といった「価値」の問題から整理したうえで、現在は「楽しさ」が軽視されていることを問題視している。そのため、学校体育に「楽しさ」の価値を持つ「遊び」の観点を導入する必要があるという。具体的には、従来着目されてこなかった「遊び」の要件である「可逆性の自由」に現象学的な立場から着目する。

「可逆性の自由」の観点から捉えると、現在にいたるまで、教育課程外の部活動が教育課程内の教科体育や特別活動とは異なる価値基準に重きがあったことで、総体としての学校体育のなかに「遊び」が担保できていた可能性があるという。なぜなら、価値基準の異なる活動（課程内／課程外）が「可逆性の自由」を総体としての学校体育に担保できていたからである。しかし、部活動が地域展開することで、総体としての学校体育に変化が生じる可能性がある。だからこそ、これからの中学校体育は互いのペースペクティブを打ち消し合うような価値を含みこむ必要があると述べる。

その鍵となるのが、新しい時代のなかで再評価される「身体」と「遊び」との結びつきである。松田先生によると、「遊び」と「運動・スポーツ」、「学び」は切り離されたものではなく、相互につながる関係にある。そうしたなかで、身体を「知る」「護る／整える」「楽しむ」ものとして捉え直し、日々変容する不合理な「身体」に価値を置くことが重要であるという。そして、それを可能にするためには学校という「壁」を取り払って「学校現場」「政策」「研究」の三位一体での協働が必要であることを強調する。

3人目の報告者である野崎武司先生は、筑波大学大学院体育研究科を修了後、香川大学教育学部、教職大学院高度教職実践専攻にて教鞭をとる。また、附属高松中学校校長、教育学部長、香川大学教育担当理事を歴任している。専門は身体教育学、教育学であり、近年は体育・スポーツ研究から離れ教職研究にも従事している。野崎先生からは「部活動地域展開がもたらす保健体育教師へのインパクト」というタイトルで報告がなされた。以下、概要である。

野崎先生は、まず部活動を支えてきた言説を確認することで、部活動に対する社会からの期待を整理した。その結果、部活動に対する否定的な発言の背後には教育課程外の「（競争の論理に基づく）学校部活動は、学校教育の遂行を妨げる一つの大きな要因となっている」という言説があることを指摘する。他方で、肯定的な発言の背後には「新自由主義を基にした学校教育は、子どもの人としての成長を支えるという本質的な役割を見失いやしない」なかで、「学校部活動は、教師が生徒と触れ合う貴重な機会であり、学校教育の本質（学校としてのちゃんとした仕事）を支える教育課程の重要な一部である」という言説があることも確認する。野崎先生によれば、これら両者の見解の差異は「教育課程」の捉え方のちがいに関係しているという。

このような言説が存在するなかで部活動が地域展開することを踏まえ、部活動がこれまで抱ってきた諸々の期待を学校体育の中にどのように取り入れていくかが課題として提示された。部活動肯定論側の「教育課程」の捉え方や部活動の価値・存在意義を確認したうえで、「学校部活動の存在意義は、社会の高度化等により累積的に付加される教育課程のなかで見失われがちな、『子どもの事実（Needs）に向き合う教育』を内包している点にある」と指摘する。このことを踏まえ、「体育教員」が「子どもの事実（Needs）に向き合う教育」を部活動以外の「教科体育、体育的行事、生徒指導、さらに新しく生じる課題解決などなどで、体育の専門性を發揮していく」ことが求められるという。そうすることで、「部活は学校教育を支える力となっている」のような部活動に紐づけられた価値の言説を、今後は「体育は学校教育を支える力となっている」のような形で体育と紐づけていく必要性が強調された。

質疑応答では、主に部活動の地域展開にともなって部活動の価値が失われてしまうことの懸念や問題について議論がなされた。具体的には、生徒の学校へのコミットメントを調停する役割を果たしてきた部活動が地域展開することの懸念、部活動が地域展開することによって教育課程内と教育課程外といった教育のなかでの「水平的多様性」が損なわれる可能性について質問がなされた。報告者3名の先生方によって、回答に多少の違いはあったものの、全体を通して「コア・カリキュラム」としての教科体育を充実させていくこと、学校内ののみの閉鎖的な教育ではなく地域などのネットワークを活かした教育を志向していくことの必要性が共有された。

最後に清水先生は総括として、1990年代の週休二日制導入時にも「学校体育不要論」や「ミニマム論」が唱えられたことに触れつつ、今日では学校外にスポーツ環境が整備されるなかで、学校体育の独自の存在意義を訴えない限り「学校体育不要論」は消えないことを指摘し、「我々のような体育学・体育実践専門家が体育のレゾンデートルを問うという精神を失わないということ」が大切であることを述べて本シンポジウムを締めくくった。

本シンポジウムを通じて筆者の印象に残ったのは、本田先生が提起した「コア・カリキュラム」の指摘が、本シンポジウムの副題や松田先生の報告にあった「レーンデール」の議論、さらに野崎先生の報告における学校体育のカリキュラム再編の議論と通底していた点である。部活動の地域展開が進められるなかで、改めて学校体育の「レーンデール」とは何かを問い合わせ直す必要性が示唆されていた。実証研究を主な基盤とする社会学領域の立場からも、現場の実態に即した議論を重ねていくことの重要性を強く意識させられた。

また報告者3名の先生方に共通していたのが、学校教育が「水平的多様性」に向かう方向性を共有していた点である。近代スポーツを教材とすることの多い学校体育や部活動では、その特性上「垂直的序列化」と「水平的画一化」が生じやすい可能性がある。だからこそ、そうした傾向を自覚的に回避し、異なる在り方を模索していく必要があると感じた。

その際に鍵となるのが、松田先生や野崎先生の報告にもあった「身体」の再位置づけであろう。これは学校体育の新たな方向性を拓く視座となりうるよう思う。体育経営管理専門領域と並んで、体育社会学の近接領域でもある体育哲学領域でも近年、現象学的な立場から「土壤」としての「身体」の重要性が論じられ、多様で流動的な「身体」を育む学校体育の可能性が提起されている。誰一人として同じではない「身体」を基点に学校体育を構想することは、「水平的多様性」の時代における学校体育の「レーンデール」となり得るだろう。

今回は体育経営管理領域との合同シンポジウムであったが、今後も領域横断的な議論を積み重ねるなかで、体育学や体育実践に携わる私たち一人ひとりが、教科体育と部活動を含めた学校体育、さらには学校教育そのものの「レーンデール」を真剣に探究し、社会に示していく責任があることを改めて自覚させられた。



松田会員の報告の様子

須藤巖彬（早稲田大学大学院）

<『年報体育社会学』編集委員会より>

編集委員長の任を仰せつかつて、約半年が経過しようとしております。この役目、正直大変な業務とは感じつつも、「役得であるなあ」とも思えていいます。何が役得であるか。それは、会員の皆様方の英知が凝縮された論考にいち早く接することができる、また、査読者とのやりとりの過程で、その英知がより洗練されたものとなり、「成果品」として世に問われていく感動に接することができるからです。いやはや私自身もまた、投稿者とシンクロしながら、おおいに勉強させていただいている次第です。これからも素晴らしい体育社会学の知を発信できるよう、編集責任者として尽力してまいります。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

さて、定例のインフォメーションでございます。「年報 体育社会学」編集委員会では、現在第7号（2026年4月刊行）の投稿論文の原稿を受け付けております。投稿された論文が2026（令和8）年1月末までに論文審査を終えて採択されれば第7号への掲載となります。1月末を過ぎても採択後には翌年の機関誌の刊行（第8号）を待たずにJ-stageへ早期公開し、可能な限り投稿者の研究成果を国内外の研究者に広く共有してもらえるよう編集体制を整えております。投稿先を検討中という会員の皆様は、是非とも「年報 体育社会学」へのご投稿を検討ください。なお、投稿には締め切りはございません。年間を通じて投稿を受け付けておりますので、何卒よろしくお願ひいたします。詳細は、「投稿に関わる諸規程等一覧」をご覧ください。

https://jsspe.org/wp-content/uploads/annualreport_regulations_20230625.pdf

「年報 体育社会学」J-STAGEはこちらからご覧いただけます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/arspes/-char/ja>

編集委員長 谷口勇一（大分大学）

<事務局より>

日本体育社会学会第3回学会大会、並びに日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会での体育社会学専門領域としての活動を無事終えることができました。改めまして厚く御礼申し上げます。

1. 2026年度の学会大会について

第4回日本体育社会学会大会は2026年6月27日(土)・28日(日)に早稲田大学所沢キャンパスで開催されます。また、日本体育・スポーツ・健康学会大会は2026年8月31日(月)～9月2日(水)に北翔大学で開催されます。詳細は会報、ホームページ等でお伝えいたします。

2. 『体育社会学の課題と展望』の刊行について

日本体育社会学会テキスト編集委員会編『体育社会学の課題と展望』が大修館書店より刊行されました。本書は、現在の体育社会学という学問領域における課題や今後の展望について、学会構成員の皆様と共に分担執筆した共著となっております。体育社会学の最新の動向を学ぶための教材としても最適ですので、ぜひお手に取ってご覧いただき、研究や授業・ゼミ等でご活用ください。

3. オンラインレクチャーシリーズについて

オンラインレクチャーシリーズでは、第1回の菊幸一先生(国士館大学)に続き、第2回に山口泰雄先生(神戸大学名誉教授)、第3回に松田恵示先生(立教大学・神戸親和大学)、第4回に岡出美則先生(日本体育大学)をお迎えし、大変充実したご講演をいただきました。多くの皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。第5回の佐藤貴弘先生(筑波大学)には「ASSOCIATE EDITOR の視点から分析した体育・スポーツ(文系・教育系)の国際学術研究の動向」をご講演いただく予定です。第6回以降も、多彩な講師陣によるオンラインレクチャーが展開されます。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

4. 会員へのご連絡について

会員へのご連絡には、本会のシステム(但し、日本体育社会学会のみ会員の皆様へは事務局システム)を利用しておられますので、随時更新をお願いいたします。登録変更は日本体育・スポーツ・健康学会の下記ページにて手続きを行ってください。また、メールが届いていない方がおられるなどご不明な点がございましたら、事務局までお知らせください。

日本体育社会学会事務局 E-mail jimukyoku@jssspe.org (担当:常行)

5. 新会員制度と会員募集について

2025年1月より新会員制度が導入されました。日本体育・スポーツ・健康学会に所属されていない方でも、理事会の承認を得て会員になることができます。会費は、日本体育・スポーツ・健康学会所属の正会員は年額3,000円、それ以外の正会員は5,000円、学生会員は3,000円となります(名譽会員からは徴収いたしません)。お近くの研究者の方、指導学生などにご周知いただければ幸いです。

6. 『年報 体育社会学』の販売について

『年報 体育社会学』第6号が杏林書院より販売されています。大学図書館などの所蔵として、定期購入をご検討・ご依頼いただければ幸いです。

<https://www.kyorin-shoin.co.jp/book/b10134951.html>

7. 事務局の連絡先

事務局のメールアドレスは以下の通りです。 jimukyoku@jssspe.org (常行)

○理事会議事録

2025 年度 日本体育社会学会 第4回理事会 議事録

期日：2025年8月28日（木）12:20～13:20

場所：日本体育大学世田谷キャンパス（会場3206）／オンライン（ハイブリッド開催）

出席者：高峰修（会長）、清水諭（副会長）、水上博司（理事長）

石坂友司、石澤伸弘、大勝志津穂、大沼義彦、下竹亮志、白石翔、高橋豪仁、

谷口勇一、中澤篤史、中山健、中山健二郎、原祐一、前田博子、村本宗太郎、

依田充代、渡辺泰弘（以上理事、敬称略、五十音順）

常行泰子（事務局長）、稻葉慎太郎（事務局次長）、工藤康宏（会計担当）（敬称略）

出席者（オンライン）：伊藤央二、甲斐健人、笛生心太（以上理事、敬称略、五十音順）

有山篤利、宮本幸子（以上監事、敬称略、五十音順）

欠席者：高橋義雄、渡正（以上理事、敬称略、五十音順）

司会：水上理事長

議事録：常行事務局長

議事に先立ち、高峰会長より挨拶がなされた。

<報告事項>

1. 日本体育社会学会第3回大会報告

2025年6月に開催された日本体育社会学会第3回大会について、工藤理事より監査前である会計報告（暫定版）がなされ、各項目及び収支の見通しに関して説明された。入会金・年会費と大会参加費の納入口座が一緒であったことから返金分の詳細が報告された。

併せて、学会大会の口座については、法人格を持たない団体のゆうちょ銀行の口座開設は難しいことから、今後は、大会実行委員長の個人口座を含め、他の有効な方法について検討する必要があり、石坂理事からPayPalが検討材料として提案され、原理事より税制上適正にすすめる重要性も示された。

2. 各委員会報告

2025年6月大会以降の中間報告及び2025年度活動計画について、各委員会から報告された。

研究委員会では前回大会以降の動きはなく、オンラインレクチャーシリーズがあることから専門領域研究セミナーは開催しない方向であり、9月以降に次年度の企画を立案する計画について報告された。編集委員会では、年報体育社会学の投稿論文が新たに2編増えた。広報委員会では、会員間のコミュニケーションを促進することを目的として、学会員において親しみやすい記事の掲載を検討している。

学会大会委員会からは、日本体育社会学会第4回大会が2026年6月27日（土）、28日（日）、早稲田大学所沢キャンパスにおいて開催される予定であり、準備を進めていることが報告された。国際交流委員会は、今年度の活動計画において体育社会学や教育現場におけるスポーツ活動をテーマとする海外研究者のリサーチを行い、国際スポーツ科学体育協議会へ参加を検討している旨が報告された。

※国際スポーツ科学体育協議会（International Council of Sport Science and Physical Education : ICSSPE）

<https://www.icsspe.org/>

上記に関連して、清水副会長より、国際的な研究者を発掘してつなぐと同時に、国際学会誌と研究者をセットにした調査の情報共有が要望された。

事務局からは、オンラインレクチャーシリーズの開催状況と計画、発表抄録集作成に関するアナウンス改善及び学会大会口座に関して報告された。前田監事より適正な口座管理と会費に関する名誉会員へのメール配信（名誉会員は会費の支払いが不要であることを付記する等）について意見が出された。

執行部からは、本会による専門領域への意見聴取アンケート提出に関連して、応用領域研究部会における今後の方向性において、ボトムアップ式に学会員が主体的なプロジェクトを遂行する、テーマを提案する等のアイデ

アが提案された。これを受けた中澤理事より、応用研究部会の機能及び専門領域の活動制限といった問題点に関して意見が出された。

また、女性の代議員比率についての情報共有や女性大学院生の育成等も重要であり、看護あるいは栄養等における学問領域とのコラボレーションの可能性が示された。石坂理事からは、女性代議員選出により女性比率を高めることも検討材料として示された。

本会の会員システムにおける課題や若手会員へのアプローチが説明され、今後の少子化や大学改革における長期的な視点での検討が重要であると説明された。2025年10月発刊を目指してテキスト出版が進められていることが報告された。

3. その他

日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会は、申込みが約2,000名、8月28日時点で約1,200名の参加者であることが依田本部連携事務局次長から報告された。

<審議事項>

1. 2025年度補正予算案

2025年度補正予算について、オンラインレクチャーにおける学会員外の講師謝金を1万円とすること、これは「経費支出基準内規」とは別のオンラインレクチャーに限っての金額であることが説明された。そしてこの講師謝金予算を5万円（1万円×5名）として、当初の予算案15万円が20万円になる旨が水上理事長より説明され、異議なく承認された。

2. その他

特になし。

最後に、学会による情報発信や体育教員とのつながりを含めた社会との連携における重要性が有山監事により示された。学会大会副委員長であり、本部連携事務局次長である依田理事に感謝の意が示され、水上理事長より閉会の挨拶が行われた。

次回理事会は、必要に応じて開催される予定である（日時未定、メール審議を予定）。

以上

○総会議事録

2025年度 日本体育社会学会 第2回総会 議事録

日時：2025年8月29日（金）13:00～13:30

場所：日本体育大学世田谷キャンパス（会場1201）

出席者数：40名

司会：水上理事長

議事録：常行事務局長

議事に先立ち、高峰会長より挨拶がなされた。

<議題>

1. 議長、議事録署名人の選出

会員から立候補がなかったため、執行部提案により、秋吉遼子会員が議長に選出された。また、議事録署名人は会員から立候補がなかったため、同様に渡辺泰弘会員、白石翔会員が選出された。

2. 2025年度補正予算について

理事長より、オンラインレクチャーシリーズ開催に伴い、6月大会で承認された2025年度案について補正予算を組む必要性のあることが説明され、異議なく承認可決された。

3. その他

特になし。

<報告>

1. 第3回日本体育社会学会大会報告について

2025年6月21日（土）・22日（日）に東北大学で開催された大会について、甲斐大会実行委員長に代わり、事務局会計担当の工藤理事から暫定の会計報告がなされた。また、次回以降の大会口座について、学会年会費と大会参加費を区別して取り扱う必要がある旨の説明があり、これに関する質問や意見は出されなかつた。

2. 各委員会報告について

第1回総会以後の委員会活動について、各委員会委員長から報告がなされた。特に質問や意見は出なかつた。

3. その他

水上理事長より、同日開催された専門領域連絡会議の報告がなされた。応用（領域横断）研究部会のあり方について各領域から報告があり、体育社会学からは演者の選考やテーマ設定等に工夫が必要となること、会員がボトムアップにテーマセッションを立案することなどが提案された。女性の代議員比率について、専門領域や地方支部別の比率を調査する必要性も示された。会員情報管理システムについて、改善のための方策が石坂理事により教示された。若手の支援も重要であり、大学院生、特に女性大学院生を増やす仕組みの重要性が示唆された。最後に、現在編集作業が進んでいるテキストが2025年10月に出版される見込みであることが報告された。

議長より、閉会の挨拶がなされた。

以上

議事録署名人

渡辺泰弘

議事録署名人

白石翔

事務局長 常行泰子（神戸市外国語大学）

<新企画「ちょっと一息、体育社会学」始動によせて>

2025年6月、日本体育社会学会第2期目の理事会が始まりました。創立3年目という若い学会であるため、まだ会員同士の密な交流が確立されているとは言いがたい状況です。広報委員会としては、学会内のコミュニケーション促進も委員会の重要な役割であると捉え、活発な交流の機会を生むことのできるような企画を検討してきました。

検討の過程で、平賀慧委員より、以下のような提案がありました。ご本人の許可を得て、以下、転載します（一部改変）。

日本体育・スポーツ・健康学会の「若手研究者コラムリレー」のような文量・形式で、若手に限らず学会員の方々の自己紹介的なものを、個人的には読みたいなと思います。

なぜなら、日本スポーツ社会学会には参加されていない会員の方々と私自身、交流のチャンスを作れていなかったためです。

現在なさっている研究のことはもちろんですが、出身地や大学・大学院時代での経験、ライフィベント（出産・育児・介護など）の経験、その中の人生のtipsを、一読者としてはぜひ読みたいなと思います。ニュースレターの文章をきっかけに、「出身地が近い」「同じスポーツをやっていた」「同じ年代の子どもがいる」といった身近な話題を見つけ、学会大会でお会いしたときに話しかけるハードルが少しでも下がることに期待しています。

これから学会を支える若い委員からの説得力のある提案を受け、この案をベースに新企画を検討して参りました。その結果、「ちょっと一息、体育社会学」という新企画を開始することとなりました。

本企画の大きな方針は、以下のよう�습니다。

- ・学会大会時などにちょっとした交流のきっかけを作ることを目的とする。
- ・毎号3名の会員に執筆をお願いする。
- ・日本体育・スポーツ・健康学会若手の会「若手研究者コラムリレー」のように自由に執筆いただくのではなく、こちらからの質問にお答えいただく形を取る。
- ・質問は研究に関することのみでなく、その方の人となりの分かるものも含める。

当然、これまでのニュースレターの各コンテンツは維持しつつ、毎号の巻末に「ちょっと一息」付けるような、一服の清涼剤になるようなコンテンツとなればよいと思っております。第1回の今号では、高峰会長、そして2人の広報委員が登場します。こちらをひとまずの「叩き台」とし、レイアウトや内容など、今後プラッシュアップしてまいります。ぜひ様々なご意見をお寄せいただければと思います。また、次号以降、会員の皆様に執筆をお願いしていく予定ですので、ご協力のほど、どうぞよろしくお願ひいたします。

広報委員長 笹生心太（東京女子体育大学）

<あとがき>

今年度より、笹生心太先生および平賀慧先生とともに広報委員を務めることになりました立教大学の村本宗太郎と申します。新体制となり2回目のニュースレターをお届けいたします。

今号は、日本体育・スポーツ・健康学会第75回大会の振り返りがメインの内容となっております。体育社会学専門領域と体育経営管理専門領域との合同シンポジウム「部活動地域展開後の学校教育・体育を再考する—レーションデーと事業構造—」の内容については、須藤会員によるご報告をご覧ください。

今号からのニュースレター新企画として、「ちょっと一息」のコーナーが始まりました。本企画は笹生広報委員長の「始動によせて」でのご説明にありますように、会員間での研究テーマに加え、ちょっとした交流のきっかけをつくりだすことを意図してスタートしたもので、学会誌や学会発表等で名前を見かけながらこれまであまり話したことのない会員同士でも、各会員の人となりを「ちょっと一息」を通じて知ることで、日本体育社会学会がより良い研究コミュニティとなるための企画です。会員の皆さんにおかれましては内容を楽しみにご覧いただきながら、ご自身が依頼されましたらぜひお引き受けいただきますよう、お願ひ致します。

さて、2025年も数多くのスポーツに関する出来事がありましたが振り返ると、高校野球部における部内不祥事と夏の甲子園大会での1回戦勝利後の大会辞退、複数の高校サッカーチームでのいじめと大会辞退、高校バレーボール部での暴力による教員の懲戒免職等、部活動における不祥事が例年以上に数多くみられ、かつ極めて高い社会的注目を集めています。部活動の地域展開という流れの中で、学校教育から社会教育への体制変革が指摘されるなか、体育社会学を学ぶものとして現在進行形で次々に生じる課題を問い合わせ続ける機会となっているようにも感じます。そのような中で、本学会の2025年は、『体育社会学の課題と展望』の刊行や、オンラインレクチャーシリーズの開始など、課題を問い合わせるために見方を学ぶ機会が増えた1年であったように思います。

2026年はスポーツ大会では、ミラノ・コルティナ冬季オリンピック・パラリンピック、ワールド・ベースボール・クラシック、サッカー・ワールドカップ、名古屋で開催される第20回アジア競技大会等、多くの国際大会が開催されます。学会としても、6月に日本体育社会学会第4回大会（早稲田大学）、8月には日本体育・スポーツ・健康学会第76回大会（北翔大学）が開催されます。学会大会でお会いする際には、研究の交流に加え「ちょっと一息」を通じた新たな交流が創出されることを期待しつつ、私自身楽しみにしております。会員の皆さんにおかれましてはどうぞ良いお年をお迎えください。

広報委員 村本宗太郎（立教大学）

高峰 修(たかみね おさむ)



プロフィール



明治大学政治経済学部教授。博士(体育学)。

出身地 千葉県流山市

出身大学・大学院 横浜国立大学教育学部、横浜国立大学大学院
教育学研究科修士課程、中京大学大学院体育学研究科博士後
期課程

職歴 中京大学体育研究所助手を経て2005年から明治大学政治経
済学部講師、2009年から准教授、2015年から現職。

主な業績 高峰修ほか編著『現代社会とスポーツの社会学』(杏林書
院、2022年)など。

わたしの研究

●現在の研究テーマ

ジェンダーに関する知識がいかに体育・スポーツ科学に浸透していくのか
(なぜ浸透しないのか)。

●研究を始めたきっかけ

学部時代の指導教員の姿を見ていて、
研究職に興味がわきました。

●最近読んだ本・論文

アン杰ラ・サイニー『家父長制の起源』(集英社、2024年)

●その印象を一言で

家父長制の起源について、旧石器時代から現代に至るスパンで、生物学、
考古学、文化人類学等をまたがって検証していく壮大さが魅力です。

●実は取り組んでみたい研究

体育やスポーツ環境における「ケア」の
可能性について、男性性(特に暴力性)
との関係だったり、保健(特に包括的性教育)
の学習による効果などについて考えています。



小さい頃のわたし

●熱中していたスポーツ

中学校時代に始めたサッカーを、大学
では地域の社会人クラブに所属して行
いました。まだJリーグが誕生する前
の話です。場所からトレーニング機器から
すべて自分たちで準備・手配し、「ス
ポーツというのはやりたい人が自分たち
で自主的に条件を整えてやるもんなん
だ」と自覚する貴重な経験になりました。

●好きだったこと

とにかくじつとしていられず、身体を動
かすことが好きでした。野山を自転車で
走り回ったこと、木登りをしたことなどの
経験が、実は今の仕事(キャンプ実習
やボルダリング等)に役立ったりしてい
ます。

●人生の転機

一浪して臨んだ共通一次テスト(現大
学入学共通テスト)で失敗したこと
でしょうか。その得点では第1希望の理工
系学部の合格は見込めず、教育学部の
体育科に進学することになりました。

●将来の夢

「人生の転機」に書いた経緯で教育学
部に入学してから、自分が体育の教員
に向いていると気づきました。

普段のわたし

●好きな本

同僚の重田園江さんが書いた一連の
著書。日本語がうまいせいか、難しい
話にもすぐに引き込まれます。

●好きな音(楽)

50歳を過ぎた頃から集中力が極端に
落ち、いろいろ試しているうちに、ハン
ドパンの音を流していると集中できること
を発見しました。

●好きな映画

ジェンダー研究をしているくせに、家父
長制やホモソーシャル満載の映画
「ゴッドファーザー」が好きです。

●趣味・マイブーム

最近、道ばたにむしている苔に心引か
れるようになりました。
中年になってからバイクの免許を取り、
400cc→900cc→250ccに乗っています。

●居住地の自慢

神奈川県の厚木市に住んでいます。
職場までは1.5~2時間ほどかかるので
すが、自然が豊富で心が安まります。し
かしいつか自宅近くに流れている川が
氾濫するのではとハラハラしています。

【クイズ】

左上の写真で私が抱えているのは、ある
世界的なアスリートの靴(実物)です。
さて、だれの靴でしょう?
(メルボルンにあるナショナル・スポー
ツ・ミュージアムにて)

平賀 慧(ひらが けい)



プロフィール



東海大学スポーツプロモーションセンター特任講師。修士(体育学)。

出身地 東京都狛江市

出身大学・大学院 筑波大学体育専門学群、筑波大学人間総合科学研究科博士前期課程体育学専攻、筑波大学人間総合科学研究科博士後期課程体育科学専攻(現在も所属)

職歴 2025年4月から現職。

主な業績 「肢体不自由養護学校における「医学」と「教育」のせめぎあい:1971年学習指導要領の「養護・訓練」をめぐる小池・成瀬論争に着目して」(『年報 体育社会学』4:55-67)など。

わたしの研究

●現在の研究テーマ

養護学校・特別支援学校における運動指導。教育現場における障害がある子どもたちの身体の捉え方や運動指導のあり方が歴史的にいかに変遷してきたのかについて関心があります。

●研究を始めたきっかけ

ハンドサッカーというスポーツの活動や大会にボランティア参加したこと。ぱっと見では一体何が起きているか分からないのに、選手・指導者はスムーズに試合をしていてとても驚きました。

●最近読んだ本・論文

市川沙央『ハンチバック』(文藝春秋、2023年)

●その印象を一言で

グループホームに住む主人公の語りから様々な「特権性」について考えました。同時期に読んでいたR.マクルーア(2006)『クリップ・セオリー: クリアと障害』の副読本として、ガツンときました。

●実は取り組んでみたい研究

少年院での体育指導に関する研究。現在取り組まれている実践はもちろんですが、歴史的にどのような変遷を経てきたのか、一から研究してみたいです。

小さい頃のわたし

●熱中していたスポーツ

小学校ではミニバスケットボール、中学・高校・大学ではソフトテニスをやっていました。戦績は常にマイナーチャンピオンでしたが、部活動では気合い入れて声を出し続けていました。

●好きだったこと

基本的にインドアなので、姉がプレイするポケットモンスターのゲーム画面を覗き込むことが大好きでした。

●憧れ・スター

SLAM DUNKの3ポイントシューター三井寿のプレーが憧れでした。モーニング娘。では、ゴマキに圧倒的な存在感を感じていました。

●将来の夢

パティシエ、お花屋さんを経て、学校の先生でした。高校生の時はアスレチックトレーナーを目指していました。

●人生の転機

都内女子中高一貫校で運動が「できる」方だと思って入学した大学入学時。自分の運動能力やスポーツに対する考え方、いかに狭い社会で培われてきたのかを実感しました。

普段のわたし

●好きな食べ物・飲み物

ラーメン。つくば市のレベルの高さを最近痛感しました。現所属先の近くでお気に入りのお店を探したいと思います。

●好きな音楽

常に受動的に音楽を摂取しています。姉が、家族が、友達が、世間が…聞いているものを探していました。今年RIP SLIMEが再結成して嬉しかったです。

●出身地／居住地の自慢

日本で2番目に小さい市だそうです(1位は埼玉県蕨市)。端から端まで歩くことができます。

●趣味・マイブーム

実家で飼い始めた猫を吸うこと。ただ、猫アレルギーのため、一瞬でくしゃみ・鼻水・目の痒みが出ます。



笹生 心太(ささお しんた)



プロフィール



東京女子体育大学准教授。博士(社会学)。

出身地 埼玉県入間市

出身大学・大学院 東京大学教育学部、一橋大学大学院社会学研究科(修士課程・博士後期課程)

職歴 仙台大学講師、東京女子体育大学講師、2020年から現職。

主な業績 『「復興五輪」とはなんだったのか:被災地から問い合わせ直す』(大修館書店、2022年)など。

わたしの研究

●現在の研究テーマ

スポーツとナショナリズム。特に、スタジアムでの熱狂ではなく、それ以前に日常生活の段階で、スポーツ報道を通じてナショナリズムを刷り込まれることに興味があります。

●研究を始めたきっかけ

高校生時代、サッカーW杯フランス大会アジア最終予選の日本開催の試合すべてに足を運びました。自力での予選突破が消えた際、気を失うほどショックを受けた自分に驚いたことが、研究のきっかけです。

●最近読んだ本・論文

エプスタイン『スポーツ遺伝子は勝者を決めるか?:アスリートの科学』(早川書房、2014年)

●その印象を一言で

ある人間の特徴(例えば運動能力や性格)について、「氏か育ちか」を議論する際、社会学では後者を重視します。運動能力を議論するこの本も「育ち」の重要性を訴えてはいるものの、自分の想像以上に「氏」も重要だということに驚きました。

●実は取り組んでみたい研究

息子が少年野球チームに入っています。そこでは、子どもとコーチ、保護者とコーチ、保護者と保護者などの間、様々なコンフリクトがあります。より良い少年団のあり方について、保護者の視点から研究してみたいです。

小さい頃のわたし

●熱中していたスポーツ

サッカーのゴールキーパーをしていました。大学時代からフットサルのゴレイロに転向しました。大学時代に作ったチームが、今の東京大学フットサル部になっています。

●好きだったこと

ビックリマンカードやミニ四駆など、1980年代初頭生まれの子どもの必修科目はだいたいこなしていました。

●憧れ・スター

サッカーの三浦知良選手。W杯フランスW杯アジア最終予選の初戦、自分の前で4点をたたき込んだ姿にしびれました。

●将来の夢

学校の先生。中学時代、色々な友達に勉強を教えていました。友達の「あ、分かった!」という顔を見ることがとても嬉しかったです。

●人生の転機

一橋大学大学院でスポーツ社会学を学びたいと考えていた大学4年生次。お目当ての先生の授業に潜ろうとした、教室に人が少なすぎ、目立つため断念。代わりに偶然同じ時間に別のスポーツ社会学の授業が開講されており、やむなくそちらに潜ることになったのが、後に指導教員となる内海和雄先生との出会いでした。

普段のわたし

●好きな食べ物・飲み物

一番好きな食べ物がカツオであることに最近気づきました。仙台在住時、中島信博先生(東北大)に連れて行つていただいた居酒屋の、高知風カツオのたたきの味が忘れられません。

●好きな本

村上春樹のエッセー集(小説のほうはそこまで…)。あとは「昭和軽薄体」とも呼ばれる、頭を空っぽにして読める椎名誠のエッセー集も好きです。

●趣味・マイブーム

サウナ。最近、尊敬するある先輩研究者をサウナに連れていき、笹生式サ道の弟子として指導しています。

●最近嬉しかったこと

息子が小学校最後の公式戦でホームランを打ったこと。打てたことより、野球に夢中になっていることが嬉しいです。



●宝物

サッカーを始めてから現在まで、所属していたチームのユニフォームと、使い古したキーパーグローブを残しております。妻には捨てろ捨てろと言われますが…。